

## 博士論文審査要旨

### 角田幸彦氏論文題目

「キケローにおける哲学と政治-----ローマ精神史の midpoint-----」

早稲田大学

大学院政治学研究科

## 審査要旨

角田幸彦氏による博士学位申請論文「キケローにおける哲学と政治----ローマ精神史の  
中点----」は、補章やキケロー年譜も含めると A5 版単行本で 501 頁に及ぶ。以下、1．論  
文の構成と概要、2．論文の特徴と評価、3．結論の順で審査要旨を記す。

### 1．論文の構成と概要

申請論文は 部 6 章から成り、前 63 年キケローが執政官に当選し赴任した年から前 5  
1 年『国家について』を完成するまでの約 12 年間に時代を限定しながら、キケローの政  
治哲学を、彼の政治行程と哲学構築を追考することで、浮き彫りにしようとしたものであ  
る。この 12 年間は、カエサルがローマ国政に跳躍した時代であり、その勢いが増すにつ  
れて、元老院の政治力や責任意識が低下し鈍化していった時代であった。申請論文はキケ  
ローがこの時期に執筆した『国家について』と『法律について』、そして『弁論家について』  
を取り上げて論究している。

第 部は 3 章から成り、上記 3 作品の成立・誕生に働くカエサルの影響を扱う。第 1 章  
はカティリーナという没落貴族の国家転覆を巡ってキケローとカエサルの関係を考察する。  
両者の闘争は元老院審議の場において、拘束されている 5 人の陰謀加担者の処罰を巡って  
展開される。「父国の父」と讃えられたキケローの政治行動の一大モニュメントを事件と裁  
判（正確には元老院審議）を素材に追跡したのがこの章である。

第 2 章はこの陰謀事件に奥深く関わり、カティリーナという陰謀主謀者を密かに支援し、  
勇気付けていたのがカエサルであることを、改めて様々な資料を用いて明らかにしたもの  
である。そしてこの陰謀にはローマーの富豪クラススも結びついていたことが詳しく示  
されている。カティリーナの陰謀事件と前 44、43 年キケロー最晩年の独裁政敷設を目  
指すアントニウスとの政治闘争・言論競闘は、キケローの政治信念、政治行動そして政治  
思想を最もはっきりと示し出した二大事績と目される。申請論文は前者の発端と展開に定  
位し、キケローの政治家としての運命的苦渋を多くのローマ史学の資料、キケローの演説  
と書簡を用いて活写しようとする。この際歴史家として特にサルスチウスの『カティ  
リーナの陰謀』を詳細に検討する。彼はローマ帝政初期（元首政）をテーマとしたタキト  
ゥスと並び立つ、ローマ共和政期の最大の史家であり、かつキケローの政治的敵対者でも  
あったのである。この辺の事柄についても本章は多角的に叙している。

第 3 章ではその背後に大きなカエサルの意志を受けていたクロディウスのキケロー攻撃、  
並びにその攻撃を受けたキケローのその後が論じられている。クロディウスはおそらくカ  
エサルの差し金で、貴族の身分を放棄し、平民に養子に入り、反統領たる護民官に当選し  
た。クロディウスの攻撃にさらされて、自ら都府ローマを脱出しギリシアへ行ったキケロ  
ーは、政治家としての将来を潰された日々を送っていた。ところがクロディウスの行き過

ぎを警戒したカエサルは、ついにポンペイウスそしてクラッススと「鳩首会談」的対応に出、キケローのすみやかな帰国、そして元老院でのクロディウスへの復讐的攻撃演説をキケローに期待する。元老院のほぼ全議員そして一般民衆の熱狂的支持で都府へ帰ることができたキケローには、クロディウスがキケローの将来を完全に封ずるために通した法案の廃止を中心に、言論闘争の緊張の日々が待っていた。本章はキケローの演説の見事さを追いつつ、彼のクロディウス撃退が成功した進展を明らかにした。

第 部（第 4 章）は、政治家キケローと哲学者キケローの緊張した人格の一如性をキケローの弁護演説中最も哲学的な格調に満ちた『セスティウス弁護』を精細に分析し、この中に示し出されているキケローの国家哲学・政治哲学を明らかにしようとする。キケローの政治哲学の解明のためには、『セスティウス弁護』において唱導された「名誉ある平安（品格ある安寧）」(cum dignitate otium)という概念の検討が要請されると申請論文は主張するのである。この「名誉ある平安」という二重的含意にこそ、ギリシアにはないローマの心性、始祖の遺風、ローマ精神史が表現されていると言ってよい。dignitas と otium の相乗・相即にこそ、ギリシアの政治哲学の視界に現れていないキケローを通して発現したローマの政治哲学の根付きがある。『国家について』の国家(res publica)概念は、2つの支柱つまり国民共通の利益(utilitas communis)と法(jus)によって成り立っている。『セスティウス弁護』は名誉(dignitas)と平安(otium)を国家（共和政国家）の脊梁とする。前者の方向は正義と公平を国家の健全なる存立とするのに対して、後者の展望は品格と抗争否定を旨としている。『セスティウス弁護』は、鮮明にキケローの真のオリジナリティーを開露している。dignitas と otium が『国家について』の「共通の利益」と「法」の如く並立しておらず、cum dignitate otium と連語化されていること、このことのキケロー的新境地こそ重要なのである。本章は、欧米のこの弁説に関する文献（論文、著書）を多く開き、このキケローの新境地をキケローの政治哲学の気高さと同道させて論じた。

第 部の第 5 章はキケローの政治哲学の2つの決定的重要性を持つ作品『国家について』と『法律について』を前著に力点を置いて論述した。『国家について』は、ローマの共和政が最善の国政へ更に高まることを期して著され、混合政体（執政官、元老院、護民官への政治権能の分割）を採用して約450年存続している父国ローマへの敬愛の念が窺われる。『法律について』は宇宙的理性とか人類的に開かれた地平による真の公平な法の確立を説きたいわば自然法理論の嚆矢である。『国家について』も、ただ純理的関心で執筆されたものではなく、カエサルの政治手法と政治野望を睥睨して構想されたものである。『国家について』は哲学が政治に目をやること、哲学が政治に下降することを単純に当然視してはいない。「ローマのプラトニスト」と言われるキケローは、魂の崇高、魂の純化をローマ人としてはおよそ例外的に求めた人物である。哲学が政治哲学に落ち着くことに深い煩悶も抱くのである。キケローは『国家について』を決して最善の国政論の更なる吟味とその内容の彫琢に全面向かわせていない。人材論、質高き政治家論があわせて説かれている。キケローは護民官による民衆のモブ化の扇動、大衆動員とそれを使噓し、活用（悪用）する民

衆派政治家たち、就中カエサル政治手法を徹底的に指弾する。また、キケローの『法律について』では脱ローマ的と形容してよい開かれた政治哲学・国家哲学が高らかに言明されている。人間は地縁・血縁にしがみついた地上の国家の住人で満足してはならないことが、切々と訴えられている。

既に述べたが、キケローの政治哲学は品格と学道を身に着けた政治家像の提唱でもあり、彼の政治哲学は教育哲学の性格を根本とする。特に『セステウス弁護』と『国家について』そして『弁論家について』は、このことを鮮明にしている。第 部の第 6 章はこのことを『弁論家について』の熟読そして多くの研究文献との対面によって掘り起こすことを眼目としている。キケローは、哲学の生硬な専門家をのみ目線に置く立場に明確に反対する。説得的展開に心を配る正しい筋立て、表現の豊かさ、ことばの艶やかさが知と教養の高さと深さと連携してこそ、弁論家は真の弁論家となる。真の弁論家とは完全な弁論家とキケローに呼ばれている。政治家は哲学、諸学の知、ことばの華麗、説得の妙技を滾々と湧き上げる存在でなければならない。しかも政治家は一つの職務、特定の責務ではない。人間が自らを形成し、いわば自己の作品化を目指そうとする限り、その行程は政治活動へ結実するのが必定である。知識的充実と雄弁的錬磨は政治家の二大支柱であるとするキケローは説いているのである。ここにこそ、キケロー政治哲学の偉大と独創と緊張がある。キケローは「ローマのプラトニスト」であると同時に、ソクラテスへの尊拝においてローマ最高の地歩に立っていた。非政治性(Apolitic) 私人性をできる限り貫いたソクラテスは、実は、いつも力強く深遠にそして切々と真のあるべき国家、善性を背骨とした国家への問いを市民に呼び掛けていたのである。『国家について』のキケローはプラトンの『国家』のイデア国家、哲人王支配を批判した。そして『弁論家について』では、今度は彼はソクラテスと対決した。キケローの政治家像はソクラテスにも色濃く通底しているのである。

補章について。ローマ共和政末期を闘った哲学者キケローとローマ初期帝政(元首政)を運命としたセネカ、この両者の哲学の方向性の相違を多少述べたのが補章である。ローマの政治哲学の二柱はキケローとセネカであるが、彼らの政治哲学、そのローマ的熟成を辿るには、ヘレニズム期ギリシアの政治哲学、特にストア派とエピクロス派のそれについての先行理解があるべきであろう。実際、ストア派開祖のゼノンもその後継者クリュシッポスも、エピクロス派の創設者エピクロスも、キケローと同時人のこの派の代表的哲人ピロデモスも、全て国家について書いている。このことへの踏み込みの準備として、この補章は意図されたものである。

## 2. 論文の特徴と評価

各審査員によって様々な視点から、申請論文に関する分析がなされ、多くの意見が述べられ、口頭試問における申請者との質疑においても活発な議論がなされたが、審査委員間で一致していたのは、申請者の精緻な分析と、広範囲にわたる先行研究の渉猟、さらに哲

学的批判精神による一貫した論旨への高い評価であった。特に、わが国においてキケローの政治思想に対する研究的論考が極端に少なく、その意味でも申請論文の持つ網羅的で巨視的な内容は、今後続くべき研究者たちの叩き台になるだけの十分な水準を持っている、との考えが示された。

以下、各審査員のコメントを個別に順を追って記す。

『セステウス弁護論』や『弁論家について』などに登場する *otium cum dignitate* は、共和政ローマの政治のあり方や、キケローの政治思想および政治行動を理解する上できわめて重要な概念であり、申請者も申請論文の第4章のほとんどの叙述を割いて詳しく検討している。このなかで申請者は、*otium cum dignitate* に関連するキケローの原典や、研究史上のさまざまな解釈を取り上げつつ、この概念を検討しているが、申請者が結局いかなる解釈を下しているのかが必ずしも明瞭に読み取ることはできなかった。たしかにこの概念は、『国家について』における *res publica* の定義（*jus* の合意と *utilitas* の共有によって結びついた人間集団）と比べて多義的であり、このためこれまでの研究者たちの間でも多様な解釈がなされてきた。このような複雑な問題を解くひとつの糸口は、この概念が『国家について』において *res publica* と定義されたローマ国家といかなる関係にあるのかにあると思われる。果たして *otium cum dignitate* が *res publica* にかんする性格づけであるのか、それとも『セステウス弁護論』の93にあるように、*res publica* の指導者（*gubernator*）が持つべき資質や条件であるかが、ひとつの大きな解釈の分かれ目となる。このうち後者の解釈を支持すると思われるのが、『ムレナ弁護論』23における *dignitas* の使われ方である。キケローはこのなかで、*res publica* を守護する者（*conservator*）が持つべき資質や条件として、「非常に好ましい利益」（*pergrata utilitas*）と並んで、「驚嘆すべき」（*admirabilis*）*dignitas* を挙げている。ここでもキケローは、*dignitas* という言葉を *res publica* を指導したり守護したりする者の資質や条件として用いているのである。さらに、このような *res publica* の指導者の持つべき資質や条件としての *otium cum dignitate* の内容にかんしても、申請論文における申請者の結論は一義的に理解することはできなかった。この点については面接の際の質疑応答で、かなりの部分が明瞭になったものの、とくに *otium* については、これを公的な活動（政治）を可能とする条件と捉える一義的な解釈は、かえって一面的になる恐れがあるという答えが寄せられた。その理由はおそらく、申請者が *otium* を *res publica* の「平安」、あるいは個人の魂の「平安」と捉える解釈を重視しているからだと考えられる。申請論文は「精神史的」アプローチを採っているため、*otium* を経済的基盤から出発して公的活動（政治）のための最大の条件と捉えることにはならなかったのであろう。

申請論文の中核をなす第4章、および第4章が全体と関連する問題に関して、審査員のうちに幾つかの疑問が生じた。*otium cum dignitate* は国家を支えるべき理念であるが、その実践に際して、伝統を踏襲して個人の倫理性を重んじることなのか、制度的な変革を志向するものなのか。『セステウス弁護』では法規を超えた暴力行為が非難されているが、

一方彼の同志であったミローとの暴力的衝突で政敵クロディウスが殺されたことをキケローはどう考えていたのか。ローマの伝統的徳の一つである *pietas* の持つ宗教性をキケローはどう考えていたのか。評価の高いカエサルと対照的に貶められているキケローを再評価する視点からは、カエサルの長所とされる軍事力、政治的決断力、政治的寛容性に関して、キケローがどう考えていたのか。申請論文ではセネカ of 思想と政治実践への展望が語られているが、帝政期の政治を支えたセネカの行動はキケロー的立場からはどう考えるべきなのか。こうした疑問に対して申請者の答えは大体以下の通りであった。キケローは選良である元老院に支えられた国家体制を最良と考え、制度的改革は念頭になかった。クロディウスの殺害は政治的な不安定な状況の中で、キケローの意図とは別の所で生じたもので、『ミロー弁護』において弁護されている。キケローは大衆を支えるものとしての俗信を否定しなかったし、宗教を軽んじてはいなかったが、その宗教は哲学思想に支えられた宇宙神学論的なもので、決して大衆の宗教と同一ではない。カエサルの偉大さは否定されるべきではないし、キケローもカエサルを評価していたが、その政治的実践の姿勢は異なっていた。セネカ在世当時の状況を考えると、キケローの立場からも決して否定されるべきものではない。キケローが哲学的修練によって倫理性を向上させた選良による元老院支配体制こそ理想的政体と考えていたという申請者の主張は一貫した論旨を持っており、その姿勢は申請論文にも明確に現れている。一方で、そうであればその体制がどうして崩壊し、対立者であるカエサルの変革がどうして後世高く評価され、ローマの広域支配が持続したのかを、キケロー的立場から批判的に考察するという視点は申請論文に関しては重視されていないように思われる。キケローの哲学思想のみを俎上にのせるのではなく、実践を視野に入れた政治思想を論じる以上は、その実現性と、現実への対応力が問われる視点があっても良かったのではないかと思われる。しかし、大部な申請論文に論文としての一貫性を持たせるといふ観点からは、政治思想の哲学的側面を精緻に分析することをより重視した申請者の姿勢は十分に理解できるし、それによって申請論文の明快な論旨が達成された事は評価されて良いであろう。

申請論文の特徴のひとつは、共和政末期ローマ政治思想の諸相を、当時の政争史を彩る政治家たちの人物評と連結させて描いていることである。申請論文の根底に存する、<キケロー対プラトン>、<キケロー対サルスティウス>、<キケロー対カエサル>という図式は、政治をめぐるローマ的規定要因としての、弁論/哲学/歴史叙述/武力の相互関係を意識してのものであらうと思われる。日本における西洋政治思想史学の分野で手薄になりがちであったローマ時代の政治思想について、キケローやサルスティウスの一次資料はもちろんのこと、欧米の膨大な研究文献をも幅広く参照しつつ、政治抗争における人物評を歴史的文脈として設定するという手法を用いて描いたことは、申請論文に独自の位置づけを与えているといつてよいであろう。キケローの思想における文と武との関係や、弁論と哲学の関係を、「理念型」として整理することは、申請者のいう「精神的」手法の意に合わないことであるかもしれないが、そのことを承知であえて口頭試問においてこうした質問をし

てみたところ、一定の解答を得ることができた。すなわち、キケローにおける文と武の関係については、文人が武人を抑制するという消極的關係や、また、武人が文をも学ぶことで武人の力能のうちに文人的教養が開花するという関係にあるというよりも、むしろ文人が同時に武人であることによって両刃の剣たる武を教養化していくという立場がキケローのものに近かったであろうとのことである。また、弁論と哲学の関係については、「キケローは飽く迄も哲学と弁論との共存、相補性を説く。しかも弁論家が哲学者（的境位）になることよりも、哲学者が（降下して）弁論家となることを良しとする」（383 頁）という申請論文の記述をめぐって質問したところ、キケローのうちにあった理念が「ローマの拡大」ではなく「ローマをこえたコスモポリタニズム」であった旨解答があった。さらに、私的領域と区別されたアゴラを舞台とする、討議と立法における対等性の理念を政治参加の中軸と考えたギリシアに対して、民事法廷弁論における権利擁護のレトリックが政治参加の典型であったローマ、という対比軸を設定した上での質問もおこなった。仮にこうした対比軸が有効であるとすれば、政治参加の理念におけるギリシアとローマの相違が、両者における哲学と政治の結合のあり方にどのような相違をもたらしうるか、という問題である。これについては、ギリシア的政治参加はアテナイにおいてさえ時間的・空間的にきわめて限定された範囲でしかなされえなかったのに対し、ローマ的政治参加の理念のもつ耐久性と熟慮性が、申請者によって強調された。

申請論文においては、実際の法廷弁論である『セステウス弁護』、哲学的、政治学的論考である『国家について』と『法律について』、および弁論の精髓とその意義を論じた『弁論家について』についての考察と分析を中心としながら、政治活動に従う実践的政治家であり弁論家であるキケローがプラトンやアリストテレスに代表される難解なギリシア哲学を自家薬籠中のものとし、そこから独自の思想を展開しつつ、そうした思想的背景を持った上で、ローマにおいてあるべき政体を明確にした人物として再評価されるべきであるとの主張が展開された。その際に、本質的連関を持って論じられた諸点には、今後ローマの政治思想を考える上で、豊かで、生産的な視点が内包されている。カエサルとキケローという強烈な個性を持った二人の関係、歴史家サルスティウスの見解、プラトンやアリストテレスからの影響とそれに対する独自性、元老院中心の共和政から帝政へと向かう激動の時代における信念の堅持と処世、思想基盤と時代背景を異にするセネカへの展望、帝政期や後世における彼の政治思想の意味、などである。

申請論文を通読したとき、キケローとカエサル及びその周辺の人々に対する人物評が目立ち、先行研究の論旨の要約、鳥瞰的巨視的考察の結果として著者の主張と独創性がややもすれば後退している印象を受ける。しかし、キケローを考察するにあたってはカエサルとの対比が不可欠であることは言うまでもないし、先行研究の整理・要約は研究者として誠実になされるべきことであり、重要諸作品を政治思想の観点から有機的に論じた日本語による考察が皆無に近い現状では、キケローの重要性を指摘し、その政治思想研究に先鞭をつけた申請論文の重要性は大いに評価されるべきであろう。

### 3 . 結 論

以上をふまえ、審査員全員一致の結論として、角田幸彦氏による申請論文は博士（政治学）の学位に十分に値するものであるとの判断がなされた。すでに公刊されている申請論文によって、日本における政治思想史研究において、従来あまり省みられなかったローマ時代の政治思想に光が当てられ、これに啓発された後続の研究者が輩出する契機となるのは間違いないであろう。

2007 年 2 月 5 日

主査	早稲田大学教授(Ph.D., The University of Chicago)	飯 島 昇 藏
副査	早稲田大学教授	仲 内 英 三
副査	早稲田大学教授(博士<文学>京都大学)	宮 城 徳 也
副査	早稲田大学教授(博士<政治学>早稲田大学)	厚 見 恵一郎